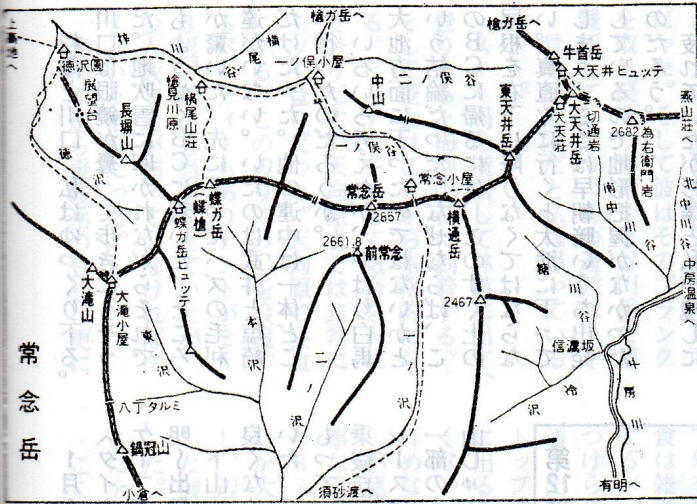


12月30日(曇のち雪)

へタイム)起床5:50(ゲート7:30)明神14:00(徳沢15:30(泊)

昨夜は良く眠れた。まだ外は真暗だがテキパキと荷物を分ける。男子は大体30kg位だ。宿の車とゼミトラでゲートまで行く。ゲートには登山者が溢れていた。計画書を提出し準備運動をして出発。いよいよ長い道程が始まった。坂巻温泉を過ぎ、中ノ湯を越え、釜トンネルに入る。トンネルの中は地



熱で暖かく勾配も急だった。いつもバスで素通りしてしまうが、こうして歩いてみると新しい発見があるものだ。トンネルの出口で「クロカン族」2・3人に抜かれた。あちらは快適に飛ばして行く。大正池をバスの上高地に着いた。あの夏の喧騒のない静かな上高地

だった。疲れたのかペースがぐんと落ちた。明神からは元気の良い人に先行してもらいテントを張ってもらおうことにした。杉澤と女性と私が後から続く。時間も遅くなりころがる様に徳沢園に着く。テントの数は25(30位)だった。テントに入ると誰ともなくビールを飲もうと言いだし、栗原が徳沢園に買いに行く。すると野沢菜のおまけをくれた。今日は汗をかいたのでビールの味は格別だった。

夕食を終え全員がジャンボに集まって飲みながら今日の反省、明日の予定を話し合う。これが今までの登山のやり方だった。全員集まったが中田が酔って1人で喋っていたので、私はリーダーと

してそれを制した。すると彼は突然怒鳴って、「言論統制するつもりか!」という様な意味の事を言った。そんなつもりは全くなかったのだが...

その後、毛利とのやりとりもあり彼の怒りは頂点に達し、遂に「俺は山を下りる」と表明する。いくら止めても無駄であった。彼は明け方1人でテントを後にした。もう強いて止める人もいなかった。これは、自分で決めた事だし、今は自由にさせるしかない。いずれこの答えは彼自身で出すであろう。しかし、私も19年山に登っているが、こんな経験は初めてだった。何とも後味悪く、眠れぬまま、朝を迎えた。

12月31日(晴)
へタイム)起床4:00(出発7:30)横尾9:00(稜線直下BC13:00(泊)
天気はずまずだった。中田の荷物は男子が分ける。今日も長い1日になりそうだ。隊は横尾を過ぎいよいよ蝶ヶ谷への急登が始まる。女性が遅れ気味なので毛利にまかせ先を急ぐ。しかし、この急登には全く閉口で、久し振りに登りがいのある山の印象だった。

本格的冬山が初めての山田、栗原、藤巻、大川らもがんばる。稜線直下に着きこころをBCとする。シラビソの向こうに穂高連峰が迫力をもって並ぶ。明日はアタック日だ。天気図は悪くない。早目に寝た。

1月1日(快晴)
へタイム)起床3:00(出発5:30)蝶ヶ岳5:45(常念岳9:30)BC13:00(泊)
85年が明けた。ヘッドランプをつけて出発。蝶には簡単に達した。初日を拜むのだろうか、数人寒そうに立っていた。ここからはトレースがないので慎重にルートを選び、最低コルに向かう。東の空、中央アルプスと奥秩父の上が明るくなっているが仲々明けない。良い場所が初日を見たいので太陽とかけっこをする。やがて雲一つない初日の出が始まる。この時大川は感激して涙を流したそうだ。

常念岳は目の前に迫り、モルゲンロートに美しく光り輝く。全員で写真を撮り再び出発し、いよいよ常念岳の登りにかかる。一步一步登って行くと、槍が、穂高が見事に広がる。来年予定されている横尾尾根も十分観察できた。立派な祠のある頂上に立つ。特別参加